

2012 年度 修士論文

ブラジル人移民集住地域における

地域住民の交流に関する研究

—群馬県大泉町のフットサルクラブを事例に—

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5011A052-3

鄭 舜圭(チョン スンギュ)

Soonkyu Chung

研究指導教員：武藤泰明教授

目次

第1章 序論	1
第1節 研究の背景	1
第2節 先行研究	3
第3節 研究の目的	5
第2章 研究方法	6
第1節 大泉町におけるブラジル人の集住の歴史	6
第2節 フットサルクラブの歴史	6
第3節 大泉町におけるブラジル人と日本人の交流	6
第4節 現地の調査日程	6
第3章 集住の契機と展開	7
第1節 集住の契機—大泉町とブラジルの要因—	7
第2節 集住の展開	8
第4章 フットサルクラブの展開	9
第1節 フットサルクラブの発足	9
第2節 フットサルクラブの現状	9
第5章 関係者へのインタビュー	10
第1節 調査対象と調査対象者	10
第2節 インタビュー方法とデータ	13
第6章 結果・分析・考察	13
第1節 結果と分析	13
第2節 考察	19
第3節 研究の限界と今後の課題	22
参考文献	24
巻末資料 インタビュー①～⑤	27

第 1 章 序論

第 1 節 研究の背景

1989 年 12 月に改正され、翌年の 1990 年 6 月に施行された出入国管理及び難民認定法(入管法)を契機に、多くのブラジル人が来日するようになった。この改正された入管法では、「定住者」ビザが新設され、日系 3 世とその配偶者までが制限のない形での就労が可能となった。入管法の改正から 20 数年が経過し、2008 年のリーマンショックや、2011 年の東日本大震災によって、ブラジル人の減少傾向が見られるものの、日本におけるブラジル国籍の外国人登録人口は 2011 年末時点で、約 21 万人にも及び、中国籍、韓国・朝鮮籍に次いで第 3 位になっている。

また都道府県別・ブラジル国籍人口(2011 年末時点)では、愛知県：約 5 万 5 千人、静岡県：約 3 万 3 千人、三重県：約 1 万 4 千人、岐阜県：約 1 万 3 千人、群馬県：約 1 万 2 千人となっており、ある特定の都道府県に人口の偏りが見られる。

その中でも特に、静岡県浜松市と愛知県豊橋市は、日本で最も多くのブラジル人が暮らす集住地である。さらに、本研究の研究地である群馬県大泉町は、ブラジル人を主とする外国人人口比率が全国で一番高い市区町村であり、2012 年 10 月 31 日時点で、外国人人口比率は 15.4%に上る。

参考資料として次頁に、「(図①)大泉町外国人人口及び人口比率」と、「(図②)大泉町外国人登録者数の推移《抜粋》」を記載する。

このようなブラジル人の増加を背景に、日本におけるブラジル人移民の研究が盛んに行われるようになった。

(図①)大泉町外国人人口及び人口比率

(2012年10月31日時点)

	国名	外国人の人口	外国人人口に占める割合
第1位	ブラジル	4,359 (+70)	68.9
第2位	ペルー	876 (+11)	13.9
第3位	フィリピン	188 (±0)	3.0
第4位	ネパール	161 (+9)	2.5
第5位	ボリビア	141 (+1)	2.2
第6位	中国	138 (+2)	2.2
第7位	韓国・北朝鮮	101 (±0)	1.6
	その他	360 (+12)	5.7
	計(全46カ国)	6,324 (+105)	100

* 大泉町役場から提供された資料を基に筆者が作成

* 大泉町の総人口:41,147人(総人口に占める外国人比率:15.4%)

* 100人以上の国を掲載

* ()内の増減数については再入国取り消しを含む

* 外国人人口の単位:人、()は前月比

* 外国人人口に占める割合の単位:%

(図②)大泉町外国人登録者数の推移〈抜粋〉

国籍	1986年	1988年	1989年	1990年	1991年	1996年	2004年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年
ブラジル	0	36	277	821	1,382	3,273	4,864	4,926	4,893	5,140	4,676	4,547	4,419
ペルー	0	0	51	175	289	521	787	839	818	857	844	850	855
韓国・北朝鮮	160	161	151	149	153	147	119	108	106	106	106	104	107
フィリピン	25	35	49	62	64	113	212	145	167	157	170	174	188
中国	6	14	26	46	130	68	99	340	378	348	194	173	137
その他	31	66	69	62	148	181	391	438	434	474	434	479	531
計	222	312	623	1,315	2,166	4,303	6,472	6,796	6,796	7,082	6,424	6,327	6,237
大泉町総人口	37,222	37,788	38,379	39,351	40,470	41,746	42,378	42,096	42,101	42,295	41,469	41,289	41,099
外国人比率(%)	0.6	0.8	1.6	3.3	5.4	10.3	15.3	16.1	16.1	16.7	15.5	15.3	15.1

* 大泉町役場から提供された資料を基に筆者が作成

* 各年とも12月31日時点

* 単位は(人)、外国人比率のみ(%)

第2節 先行研究

当初、日本にやって来るブラジル人たちは一時的なデカセギを主な目的として来日していた。そのため研究者たちも、彼らはある期間日本で働いた後、本国ブラジルへ帰国する人々として捉えていた。現在でもこのような目的で来日している人々は少なくはない。しかし、この傾向には徐々に変化が起これ始め、日本で永住を決意し一戸建ての家屋を購入する人々や、日本生まれの3世や4世が増加しつつある。ブラジル人の増加と定住化の影響について小内(2009)は、「ブラジル人が集住する東海地方、関東地方の工業都市やその周辺地域では、ゴミ出し、騒音、交通事故、子どもの不就学等、様々な問題」が生じていると指摘した。このような問題に対し、ブラジル人移民集住地の各自治体は、急激にブラジル人が増加したため、様々な局面で行政上の対応に迫られることになった。石川雅典(1995)は当時の行政の様子について、「さらに必ずしも日本語能力に長けていない日系2世や3世の人たちが増えたことにより、使用言語の違いによる伝達の不自由さのようなさまざまな困難に直面してきた。」と、試行錯誤しながら対応する行政の姿を浮き彫りにした。また都築(1998)は、「愛知県豊橋市の県営住宅におけるブラジル人と地域住民の関係がより良好になるためには、行政の対応が重要になる。」と指摘した。さらに都築は「私的領域での言語、文化は認め、自治会、生活習慣という公的領域では日本の文化を理解してもらい、将来的には統合を目指している多文化主義の過程にあるかもしれない。」と当時の状況について見解を述べた。つまり当時、行政の側からブラジル人に対して様々な対応がなされていたが、移民であるブラジル人と地域住民である日本人は、互いに良好な関係を築き、共により良い地域社会の形成と発展を目指すために協力的ではなかったことが伺える。また研究者たちは、日本人はブラジル人のことを尊重し彼らの言語や文化は認めるものの、日本で暮らすのであれば、日本社会の習慣や文化を受け入れてもらおうとする日本人側からの視点で考えていたと言える。

また、渡辺(1995)は当時の日本人とブラジル人の関係について、「ブラジルの生活様式を可能にするような状況によって、ブラジル人は日本人とあまり接触することなしにブラジル人同士で、またポルトガル語のみを使用して暮らすことが可能になった。ブラジル人と日本人との関係が生まれる磁場としては、職縁、血縁、地縁、学校縁などがある。」と指摘し、また「実際、職場の場面を越えて日本人と個人的な交流をもっている人はほとんどいなかった。」と見解を示した。さらに「地域社会でも、斡旋会社が提供するブラジル人ば

かりのアパートに住み、(中略)、ブラジルの品物を売る店で買物をし、ブラジルレストランに行き、ブラジル人同士でホームパーティーをし、ブラジルの生活様式のままで生活するというあり方が顕著になりつつある現在、むしろブラジル人のセグリゲーション(分離)が行っているように思える。」と、その実態について述べ、「ブラジル人と日本人地域住民との接触のなさを背景とし、相互理解なしの棲みわけでは、事情が変化したならばブラジル人に対するマイナスのイメージが増幅していく可能性は大きい。」とその危険性について言及した。

また近年の両者の関係について、小内(2009)は「日本人にはブラジル人の実像が見えにくいままである。日本に住むブラジル人に生じている変化を把握している者は、研究者を含め、それほど多くない。」と言及した。さらに、小内は「在日ブラジル人が日本人と現実にはどのような関係を取り結んでいるのか(中略)、といった研究は少ない。」と指摘する。つまり、現在に至ってもなお、日本人とブラジル人は必ずしも良好な関係を築いているとは言えない。さらに学術的には、日本人とブラジル人の両者の関係や交流について明らかにする必要性があることが分かる。

また、移民研究におけるスポーツ分野の研究に関して、渡辺(1995)は、「副次的産物として、サッカーの試合をとおしてブラジル人と日本人の関係の展開もみられるようになった。」と言及した。

しかし、日本の移民研究の分野において、スポーツを取り上げた研究は少ない。深見(2008)は、「従来、日本の日系移民研究において芸術・スポーツ分野に関する注目は必ずしも高くなく、(中略)、90年代以降、美術、演劇、映画、音楽、スポーツその他と、研究の裾野は広がりつつある。」と述べた。具体的な研究の例としては、「スポーツに関しては総じて研究が少なく、戦前の日系人バスケットボール・プレイヤーについての論文(水谷豊[2000.3])や、二世野球チームについての文献(永田陽一[1994]など)などいくつか出されたが、まだまだ開拓の余地のある分野であるといえよう。」と指摘した。

最近のスポーツ分野における研究としては、足立(2012)のアメリカ・ハワイの野球リーグの現状と存続の可能性を探った論文や、窪田(2012)のアメリカのドミニカ移民と野球との関わりについての論文が挙げられる。

しかし、上記の2例は研究対象地が日本ではなく外国であり、日本における移民研究において、スポーツ分野の研究は未だにほとんど見られないことが現状である。

ここまでの先行研究をまとめると、日本人とブラジル人の両者の関係は、ブラジル人が

増加した当初、良い関係が築かれていたとはあまり言えないことが分かった。ブラジル人はデカセギ労働で斡旋業者が提供するブラジル人ばかりのアパートに暮らし、日本人との交流はほとんど持たず、ブラジル人だけのコミュニティで生活が成り立っていたと言える。また何か問題が生じた際に、日本人とブラジル人の間を取り持つ存在は行政であり、日常生活レベルで両者が寄り添い、共に問題の解決を図るということはほとんど見られないことも明らかになった。そして研究者はこのような両者の問題に対し、日本人がブラジル人に日本社会を受け入れてもらおうとする視点から、その問題の解決を図ることを示唆した。さらに近年に至っても、日本人とブラジル人の交流は乏しく、両者の関係や交流について把握した研究も少ないことが明らかになった。また日本の移民研究におけるスポーツ分野の研究の蓄積もほとんど見られないことが判明した。

以上の先行研究を踏まえると、都築(2002)が指摘する2つの研究の課題が浮かび上がる。都築は「外国人労働者の急増に伴う地域社会の変化や従来から居住している地域住民＝ホスト住民に与える影響といった側面に関しての検討が不十分であり、物足りない」と述べた。さらに、都築は「外国人労働者を『移動を繰り返す一時的な【出稼ぎ者】と捉えるだけでなく、定住化しつつある新たな地域住民として把握することも必要』という視点からの考え方を示した。

つまり、新たな地域住民であるブラジル人が増加したことによる地域社会の変化を把握し、ブラジル人と日本人の交流において、ブラジル人がホスト住民である日本人に、どのような影響を及ぼしたのかについて、明らかにすることの重要性が理解できる。

第3節 研究の目的

まず、上記の先行研究の課題を、本研究である大泉町に当てはめる。すると、大泉町において、新たな地域住民であるブラジル人(＝移民である地域住民)と、ホスト住民である日本人(＝従来から居住している地域住民)の間で、どのような交流がなされているのかについて、明らかにすることが重要であると考えられる。さらに先行研究で蓄積の少ないスポーツ分野に当てはまるフットサルクラブを事例に取り上げることも、研究の価値があると言える。

そこで本研究の目的は、群馬県大泉町のフットサルクラブにおいて、ブラジル人と日本人の間に、どのような交流がなされているのかを調査することとする。

第2章 研究方法

第1節 大泉町におけるブラジル人の集住の歴史

大泉町におけるブラジル人の集住の歴史を調査するにあたり、調査者である筆者は、大泉町役場に足を運び、その歴史に関する資料の収集、また聞き取り調査を行った。その調査結果については、第3章「集住の契機と展開」の中で記述する。

第2節 フットサルクラブの歴史

研究対象であるフットサルクラブの歴史に関しては、フットサルクラブの歴史に関する詳細で正確な情報の資料やデータが存在しなかったため、創設者であり現在の経営者であるA氏へのインタビューの中で、情報を収集した。その調査結果については、第4章「フットサルクラブの展開」の中で記述する。

第3節 大泉町におけるブラジル人と日本人の交流

大泉町におけるブラジル人と日本人の交流に関しては、関係者へのインタビュー調査で、その交流についての情報を収集した。その調査結果については、第6章「分析と考察」の中で筆者が言及する。

第4節 現地の調査日程

大泉町での現地調査は、以下の日程・内容で行った。

・2012年6月17日(日)

【場所】フットサルクラブ、【内容】研究の協力依頼

・2012年11月2日(金)

【場所】フットサルクラブ、【内容】調査対象者の選出

【場所】大泉町役場、【内容】調査資料の提供の依頼

・2012年11月22日(木)

【場所】いずみ総合公園町民体育館、【内容】調査資料の提供の依頼

【場所】大泉町役場、【内容】役場職員への聞き取り調査

【場所】フットサルクラブ、【内容】調査対象者の選出

・2012年12月7日(金)

【場所】多文化共生コミュニティセンター、【内容】担当者への聞き取り調査

【場所】文化むら、【内容】担当者への聞き取り調査

【場所】大泉町役場、【内容】役場説明会に参加

【場所】フットサルクラブ、【内容】調査対象者の選出

・2012年12月14日(金)

【場所】フットサルクラブ、【内容】調査対象者へのインタビュー

・2012年12月15日(土)

【場所】フットサルクラブ、【内容】調査対象者へのインタビュー

・2012年12月19日(火)

【場所】群馬県高崎市、【内容】調査対象者へのインタビュー

・2012年12月20日(木)

【場所】大泉町観光協会、【内容】調査対象者へのインタビュー

【場所】フットサルクラブ、【内容】調査対象者へのインタビュー

第3章 集住の契機と展開

第1節 集住の契機—大泉町とブラジルの要因—

1957年3月に大川村と小泉町が合併して誕生した大泉町は、三洋電機や富士重工業を中

心に多くの製造業事業所が集積し、従来から「工業の町」として繁栄した。その一方で、多くの中小企業では、「3K(きつい、危険、汚い)」と言われる部門での労働者が減少し、慢性的な労働力不足に陥った。当初はアジア系の不法労働者を雇用していた中小企業もあった。しかし、第1章「序論」・第1節「研究の背景」で触れた通り、1990年に施行された入管法によって、合法的に労働が可能な日系ブラジル人を雇用することで労働力不足の解決を図る中小企業が多く出現した。

一方で当時のブラジルは、輸出不振などの経済情勢の悪化により、巨額の債務を抱える状況となり、急激なインフレの波も押し寄せ、失業者が増大する事態に陥っていた。

つまり、慢性的な労働者不足という問題を抱えていた大泉町と、失業者の増大という問題を抱えていたブラジルの双方の利害が一致したことで、大泉町に多くのブラジル人が集住することになったのである。

第2節 集住の展開

1989年12月、大泉町内の中小企業が中心となり、「東毛地区雇用安定促進協議会」が組織され、合法的かつ安定雇用のできる日系ブラジル人の受け入れが始まった。1990年6月の改正入管法の施行から4ヶ月後の10月には、大泉町内の小学校3校に「日本語学級」が設置され、日本語とポルトガル語の2カ国語を話せる指導助手が配置された。その後、1992年9月までに大泉町内の小中学校7校全てに「日本語学級」の設置が完了した。また大泉町役場では、1991年4月に、ポルトガル語に精通した嘱託職員を採用し、各種書類の翻訳、各種手続きや制度説明の相談などの通訳に対応できる環境を整えた。1992年3月には、「GARAPA(ガラッパ)」と呼ばれる広報誌を発行した。この「GARAPA」には、町広報誌からの抜粋と、特に外国人に知らせたい情報(防災やゴミ、水道等の使用方法や医療など)を主にポルトガル語で紹介し、ブラジル人や他の外国人の大泉町での生活をサポートした。このように大泉町にブラジル人が急増した当初から、大泉町ではブラジル人を受け入れる様々な体制が整備されてきたと言える。

さらに近年の動きとしては、2007年8月に始まった「文化の通訳」がある。これは、大泉町からのお知らせや暮らしのマナーなどを、大泉町にすでに暮らすブラジル人が、新しくやって来たブラジル人に、母国語であるポルトガル語で正しく伝えてもらうという制度である。役場によると、2012年12月時点で、約250名のブラジル人がこの「文化の通訳」

に登録している。

第4章 フットサルクラブの展開

第1節 フットサルクラブの発足

本研究の研究対象であるフットサルクラブは、1999年3月・大泉町に設立された。創設者の1人であり現経営者でもあるA氏が、弟や日系人仲間と共に空き倉庫を改装して、屋内型のフットサルクラブを作り上げた。A氏はもともと出稼ぎ目的で1991年に来日し、この時はフットサルクラブを日本で作ることは全く考えず、当初は茨城県でコンクリート関係の仕事に就いた。しかし、群馬県で行われていた日系ブラジル人のフットサル大会に参加した際、ブラジルで共にフットサルをしていた友人に誘われて、大泉町に移り住むこととなった。この後A氏はブラジルに帰国し、地元でフットサルクラブを設立しようと考えたが、治安の問題など設立に向けての障壁が多かったことから、日本に戻り大泉町でフットサルクラブを設立する決意をした。設立当初、同じ日系人のフットサル仲間や友人のためのフットサルクラブであったため、日本人は1人もいなかった。しかしA氏は、日本はサッカーの人气が高く、俊敏な身体的特徴がブラジル人と似ていることから、日本人の間でもフットサルは人气が出ると考え、大泉町で日本人にフットサルを広め始めた。最初の頃は試合に日本人のチームが参加する程度であったが、スクールにも徐々に日本人が集まるようになっていった。

第2節 フットサルクラブの現状

本フットサルクラブは、屋内型で天候に左右されずプレーできる施設になっている。そしてコートは、設立当時日本では珍しかった床のコートであり、人工芝のコートよりも球足が速く本格的なフットサルをすることができる。また、観客席やフードコーナー、飲み物の自動販売機が設置され、フットサルをするだけでなく、集まった人同士で食事や会話を楽しむことができる環境が整っている。

そして主な事業としては、スクール、試合、レンタルコートの3つが挙げられる。

スクールでは、日本人とブラジル人が一緒に同じクラスでプレーしており、人数は約 200 名で、日本人とブラジル人の比率はほぼ 1 対 1 になっている。また年齢層は、幼稚園児・保育園児から大人までで、さらに男女ともで(小学校低学年までは男女混合で)行われている。会費は、幼稚園から高校生までは、週 1 回 3 千円、週 2 回 5 千円となっている。そして大人は週 1 回 2 千円となっている。また入会・退会の制度はかなり自由で「今月は行くが、来月は行かない。でも再来月からは行こう。」という会員も認められている。そのため、気温が下がる冬の 11 月～2 月には、会員数が 50 人ほど減ることがある。

試合は毎週末に行われており、スクールのクラスで練習試合や、外部のフットサルクラブを招待した対抗試合、また一般申し込みで開かれる大会などがある。ここでもその日ごとで人数に増減はあるが、日本人とブラジル人が共にプレーしている姿が見られる。

レンタルコートは随時空きコートの時間があれば貸し出しており、誰でも予約をすれば利用できる。

第 5 章 関係者へのインタビュー

第 1 節 調査対象と調査対象者

本研究では群馬県大泉町に所在するフットサルクラブを研究対象とし、本フットサルクラブに関わりのある人物(フットサルクラブ経営者 1 名、保護者 1 名、スクール生 2 名、トップチーム選手 1 名)と、大泉町観光協会の人物(職員 2 名)を調査対象者にした。調査対象者の選定に関しては、以下の理由で選定を行った。

まず、本フットサルクラブに関わりのある人物は、研究者である著者が本フットサルクラブに足を運び、そこで出会った様々な人々と直接話をする中で、本フットサルクラブの中で繰り広げられている日本人とブラジル人の交流に関わり、且つインタビューに応じてくれる人物を選定した。さらに経営者、保護者、スクール生、トップチーム選手と可能な限りカテゴリーが異なる人物選び、様々な視点からインタビューデータを得られるように心がけた。

次に、大泉町観光協会の人物は、大泉町において日本人とブラジル人の交流に精通しており、観光協会が主催する大泉町の一大イベント「大泉カルナバル」と「活きた世界のグ

ルメ横町」に関わる人物を選定した。

そしてこれらの調査対象者の選出は、西條(2007)の「関心相関的サンプリング」に基づいて行った。西條は関心相関的サンプリングについて、「自分の関心(リサーチクエスチョン)に照らして(相関的に)対象者をサンプリングすること。」と述べる。具体的には、現実的制約を勘案しつつ、リサーチクエスチョンや研究目的に照らして対象者を選ぶ考え方である。また西條は、サンプル数(対象者数)の少なさに関して、「必ず数が必要だとは言えない。」との見解を示しており、本研究も同じ見解の基で、インタビュー対象者の人数を7名という人数で研究を行う上ことは問題がないと考えた。

以下はインタビュー対象者のプロフィールである。

《インタビュー①》

【調査対象者】：A氏

【国籍】：日系ブラジル人

【現職】：研究対象フットサルクラブの経営者兼コーチ

【前職】：元プロフットサル選手(ブラジル)

【居住地域】：大泉町内

《インタビュー②》

【調査対象者】：B氏

【国籍】：日本人

【現職】：子どもの保護者

【居住地域】：大泉町外・近郊

【子ども】：男の子、小学生

【子どものスクール歴】：約1年半、週1回

《インタビュー③》

【調査対象者】：C氏

【学年】：中学生

【国籍】：日系ブラジル人

【現職】：スクール生

【居住地域】：大泉町外・近郊

【スクール歴】：約 3 年、週 2 回

【調査対象者】：D 氏

【学年】：中学生

【国籍】：日本人

【現職】：スクール生

【居住地域】：大泉町外・近郊

【スクール歴】：約 2 カ月、週 1 回

《インタビュー④》

【調査対象者】：E 氏

【国籍】：日本人

【現職】：研究対象フットサルクラブのトップチームで現在プレー、同県内・他フットサルクラブ経営者兼コーチ

【前職】：元プロフットサル選手(イタリア)

【居住地域】：同県他市

《インタビュー⑤》

【調査対象者】：F 氏

【国籍】：日本人

【現職】：大泉町観光協会・職員

【居住地域】：大泉町近郊

【調査対象者】：G 氏

【国籍】：日系ブラジル人

【現職】：大泉町観光協会・職員

【居住地域】：大泉町近郊

第2節 インタビュー方法とデータ

本研究では2012年12月に、1対1、もしくは1対2のインタビュー調査を5組7名に
対してそれぞれ行った。

方法としては、標準化されたインタビューや質問紙を用いたときよりも、比較的オープ
ンに組み立てられた(=回答の自由度の高い)インタビュー状況の中で、インタビュイーのも
のの見方がより明らかになると期待できる(Kohli 1978)、半構造化インタビューを採用した。

そしてインタビューの際には、事前にインタビュー対象者から許可を得て、ボイスレコ
ーダーで録音した。またインタビューは45分～1時間程度実施した。

なお、インタビューデータについては、巻末資料に全インタビューを掲載した。これは
各調査対象者が語るその内容を、本論文の読者に知っていただきたいと考えたからである。

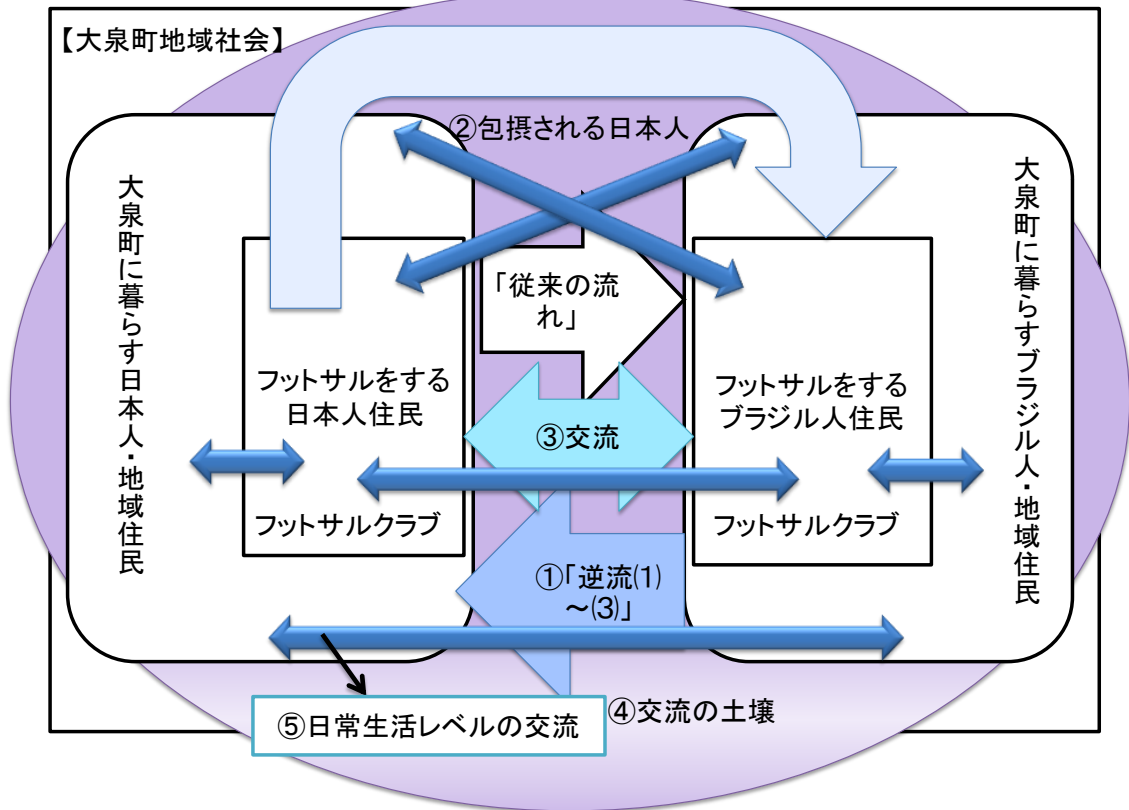
第6章 結果・分析・考察

第1節 結果と分析

ここまでの1章から5章を踏まえて得られた結果から、3つの分析を行った。

すると、本フットサルクラブにおけるブラジル人と日本人の交流は、下記(図③)で示すよ
うに表すことができた。

(図③)群馬県大泉町のフットサルクラブを舞台に見られる日本人とブラジル人の交流



まず1つ目の分析では、関係者へのインタビューから、本フットサルクラブでは、ブラジル人と日本人の交流において、ブラジル人が日本人を包摂している様子が分かった。つまり、ブラジル人が日本人をブラジルの世界へと包み込むことで、両者の交流が行われているということである。このことは、先行研究の課題で取り上げられている、新たな地域住民であるブラジル人が、ホスト住民である日本人に及ぼす影響であると言い換えることができる。そしてこの交流の様子を、①「逆流」(図③の矢印参照)と呼ぶことにする。この呼び名は、ホスト住民である日本人が、新たな地域住民であるブラジル人を日本の世界へと包摂する交流を「従来の流れ」(図③の矢印参照)と呼ぶことにするため、この「従来の流れ」の交流とは、逆の流れであることを分かりやすくするためである。そしてこの「逆流」には3つの要素があることが分かった。

まず、第一要素として、「ブラジルの雰囲気」が挙げられる。日系ブラジル人であるA氏が設立した本フットサルクラブは、まさに「ブラジルの雰囲気」に包まれた空間であると言える。本フットサルクラブのトップチームでプレーするE氏は、本フットサルクラ

ブを始めて訪れた時のことについて「びっくりしましたね。(中略)、ほんとに日本じゃねえなっていう、もう誰もがそういう風に思ったと思うんですけど、僕もそう感じました。もう売店に売っているものも違うし、そこにいる人も違うし、ゲームが始まっても周りの声援っていうのも違っていたし。」と感想を述べた。さらに E 氏は「あのクラブの雰囲気はブラジルでしょ。それが大きい小さいかだけの違いで。」と自身のブラジル滞在経験と重ね合わせて主張した。筆者自身も始めて本フットサルクラブに足を踏み入れた時、クラブ内を飛び交うポルトガル語に圧倒されたことを鮮明に覚えている。そしてこの「ブラジルの雰囲気」こそが、ここを訪れる日本人を魅了し、彼らをブラジルの世界へと包摂する「逆流」の第一要素になる。

次に、第二要素として、本フットサルクラブ内で交わされるブラジル人と日本人の「最初のコミュニケーション」が挙げられる。A 氏はインタビューの中で、本フットサルクラブのブラジルの要素について「挨拶」を何度か例に挙げている。これはポルトガル語で交わされる簡単な挨拶なのだが、子どもをスクールに通わせる保護者の B 氏が「やっぱりそういう挨拶にしても、こっちの人は触れ合うことが普通だったりするんですけど、でも日本人同士だと、やっぱり何かそういうのって親しくなるまでできなかったり。」と言うように、日本人同士ではあまり見られないが、フットサルクラブに集うブラジル人たちは、非常に気さくに互いの拳を合わせた挨拶を交わす。また A 氏が語る「初めての人、(中略)、最初は、ちょっと恥ずかしいね。あとは一、ちょっと話して、(中略)、それでちょっと気持ちは変わる。」からは、A 氏は日本人がブラジル人とのコミュニケーションに慣れていなかったり、初対面の人の前では少しシャイになったりすることが分かった上で、日本人を温かく迎え入れている様子が伺える。もちろんフットサルクラブ経営というビジネスであるため、顧客を迎えるために当然の接し方であるという見方もできる。しかし私はビジネスとして以上に、A 氏の人柄や、ブラジル人ならではのフレンドリーさや明るさによる部分も大きく影響していると考える。このことは、スクールに通う日本人の D 氏が語る「フレンドリーっていうか、そのみんなが仲良くて、その国籍とかあんまり関係ないところとかが、楽しい。」という本フットサルクラブの良さからも窺い知ることができる。このようなブラジル人と日本人の「最初のコミュニケーション」は、ブラジル人が日本人をブラジルの世界に気軽に招待するための、「逆流」の第二要素になる。

さらに、第三要素として、「本場のフットサル」が考えられる。B 氏は日本人が本フットサルクラブにやって来る理由について、「やっぱりブラジルのコーチがいてっていうのが魅

力なんじゃないですか。何か本場のフットサルをやりたいと思っています。」と述べる。本フットサルクラブにはA氏を含め、元プロ選手のコーチが2人常勤している。またD氏はブラジル人と一緒にプレーすることで、「やっぱレベルアップになるのかな、他の国のサッカーのスタイルだったり、勉強になる。」と日本人同士だけでは得られないフットサルを学べると感想を述べた。さらに元プロ選手で、現在本フットサルクラブのトップチームで活躍するE氏は、まだ日本ではフットサルが一般に広く認知されていない頃、初めてA氏のチームと対戦した時に、「まあーもあー、やっていることが違うなっていう。でも何だろう、それと同時に、これがフットサルなんだなっていうのを思って。(中略)。ほんとに競技性の違いを知ったって感じかな。」や「サッカーのトレーニングにあるミニゲームとはやっぱり違って、やっぱりもう確立された別のものだってことが、もうすぐに分かりましたね。」と、当時の発見を語った。さらにE氏は、ブラジル人のテクニックの上手さ以外について、「何でも勝負事に対する想い、やっぱりそういう強さ、そこがやっぱり日本人とは全然違うって。(中略)。上手い下手じゃないところでの勝負事っていうのが、強さを感じましたね。」と、スポーツにおけるブラジル人特有の気質に触れることができたと言った。これらのことから、各々のフットサルのレベルや関心事に応じながらも、ブラジル人がもたらす「本場のフットサル」に日本人は包摂されているため、「逆流」の第三要素になると言える。

以上のことから、ブラジル人が日本人を包摂する「逆流」には3つの要素があることが分かった。つまり、両者の交流のスタートとしてこの「逆流」は、交流を促し開始する起点となる。そして「逆流」の交流が始まることで、日本人は本フットサルクラブやブラジル人が作り出す「ブラジルの世界」に包摂されていく。この交流の様子は、②「包摂される日本人」(図③の矢印参照)として示す。ここでの日本人は当初、普段の生活の中でブラジル人との交流が乏しく、彼らの存在を異質なものとして捉えていた。しかし、交流の中で次第に自分たちが包摂されていくことによって、異質であったはずの彼らの存在や「ブラジルの世界」を受け入れられるようになり、ブラジル人との関係が築かれ、自然な形で交流が開始されることになる。これを③「交流」(図③の矢印参照)として示す。

次に2つ目の分析では、ここまでの①「逆流」、②「包摂される日本人」、③「交流」の流れによって生じた、日本人とブラジル人の関係の変化について、その分析を試みた。A氏は小さい子供たちのスクールでの様子について、「ちっちゃいから日本人とブラジル人、ね、色々コンタクト取った挨拶とか、それであの、すごいいいと思う。この前に一、例えば初

めてブラジル人見た、ちょっとびっくりとかあった。今は、ちっちゃいから、怖いとかない。ずっと前は、子どもから『外人怖い、怖い。』今は全然もうない。」と語った。つまり、小さい頃からブラジル人と日本人が、フットサルを通して一緒に遊ぶことで、両者は自然にお互いを受け入れ、国籍の違いを全く気にしなくなったことが分かる。また B 氏は自分の子どもがこのフットサルクラブに通う利点として、「結構うちの子、自分から知らない子に話しかけるとか、あまりしない方なので、あえてこういう色んな人たちと交流ができて、たぶん今日もやってる時に、知らないんですよみんな。(中略)。でも、それでも楽しく今もやってるんで、ただ、そういうサッカーだけじゃないところ。」と話すように、敢えてブラジル人と交流させることで、シャイな子どもの他人との付き合い方に良い変化が生じたことが伺える。さらに B 氏自身も、子どもがスクールをしている間、ブラジル人の保護者と交流する機会を持てたことで、「私は結構言葉を教わっています。あとはお料理のやり方とか。」と言ったように、ブラジル文化の中で自分の興味があることを、ブラジル人とのごく自然な交流の中で学んでいる様子が伺える。そして D 氏の場合は、ブラジル人と一緒にフットサルをすることで、「言葉が違うから、一緒に会話できないのかなって思ってたんですけど、日本にいるから言葉も分かっていて、その何か、ちょっと怖いのかなってイメージがあったんだけど、全然仲良くできて、だから他の外国人も別に話しかけたら、ちゃんと答えられるのかなって思いました。」と気づいた通り、それまで D 氏が抱いていたブラジル人や外国人に対する考え方やイメージが変わったことが分かる。最後に E 氏の場合、本フットサルクラブでプレーをする中で出会ったブラジル人と関係を築く中で、彼らと繋がりを持てたと実感できたのは、「そうですね、繋がりを持てたのは、まっ、飯食った時かな。始めは試合して対戦して、さよならってところから、『飯行こうよ』っていう風になったぐらいから、まーね。たぶんどうでもいい奴だったら飯には誘わないだろうし、うん、はい。」だと述べた。つまり、それまでのフットサルクラブ内での交流から、フットサルクラブ外の交流へと発展したことで初めて、ブラジル人たちと繋がりを持てたと実感できたのである。このことは両者の関係が豊かになった証と言える。

以上のことから、①「逆流」：ブラジル人が日本人を包摂することで、②「包摂される日本人」：日本人がしだいにブラジル人やブラジルの文化、習慣を自然に受け入れられるようになり、③「交流」：その後で繰り広げられる交流の中で、両者の間により良い関係が築かれることが分かった。そして、本フットサルクラブにおいては、先行研究で指摘されたブラジル人と日本人の交流の分断とは対照的に、ブラジル人と日本人がフットサルを通して

交流することによって、日本人のブラジル人に対するイメージが好転したり、ブラジル料理を教わる機会を得られたり、フットサルクラブ以外の場所での交流に発展したりと、良好な関係が築かれる④「交流の土壌」(図③の矢印参照)が生まれていることが観察できたとと言える。

最後に3つ目の分析では、本フットサルクラブにおいて見られたこの④「交流の土壌」が、大泉町のブラジル人と日本人の交流において、どんな意味を持つのか、再び関係者へのインタビューを中心に分析を試みた。

まず大泉町におけるブラジル人と日本人の交流の現状について、大泉町観光協会働く日系ブラジル人のG氏は「普段の生活だと、多分普通に生活をして行く中で、職場にいたりするので関係はあるんだけど、言語は通じないから、あんまり、こう関わりを持ち切れないって部分と、(中略)、日本のスーパーで人に会ったりとか、日本の人に対応してもらったりとか、たぶんそれぐらい。」と述べており、先行研究の通り、普段の生活の中で、両者が活発な交流を持っているとは言えない。また、毎年9月に開かれる「大泉カルナバル(サンバ祭り)」の一大イベントにおいては、大泉町観光協会働く日本人のF氏が「遠くは九州の方からわざわざ観に来るとか、もうだから県外の方が多いんですよ。」と祭りの活性ぶりを語る一方で、大泉町の人々にとってカルナバルはG氏が指摘する「うーん、逆に町内の人間の方があまり興味を持ってないし、知らないっていうパターンがありますね。」という現状がある。また、毎月1回開かれる「活きた世界のグルメ横町(世界約10カ国の料理が楽しめるイベント)」では、G氏の「結構比較的あそこを通るとやっているの、寄ってみようかなって人は多いみたいで。」ということから、賑わいを見せるイベント当日は、ブラジル人と日本人が顔を合わせる機会が創出されていると言える。

しかし、カルナバルに大泉町の人々があまり興味を示さない要因の1つとして、F氏は「その理由はその昔のお祭りで、ブラジル人が大騒ぎしたこと。(中略)。朝までドンチャン騒ぎして、これも警察でペケをもらって、で結構、大泉の人たちには反ブラジルって方も多いんですよ。」と指摘する。これは先行研究で指摘された問題が、現在の大泉町でも浮き彫りになったと言える。今現在、ブラジル人たちがどれほど騒ぐのかという質問に対し、G氏は「そうですね。比較的落ち着いてはいますね。でももともとお国柄夜遅くに出ることも普通ですし、音楽とかも結構音量が大きいってのも、お国柄なので、未だにちょっとはありますけど、まあイベントでもない限りダァーってことはないの。」との見解を示したが、ブラジル人住民と日本人住民の間で、どれほどの相手のことを理解できているかは

不明である。やはり、両者の交流が盛んで、相互理解が進んでいるとは言い難い。

このような現状に対し、日常生活レベルでのブラジル人と日本人の交流を促すための対策について、F氏は「私も最初は全然知らない人ばかりでしたから、こうただ会えば『こんにちは』ぐらいでね。でも段々こう会って話して握手したりね、あの一色々話すようになりますから、まずは知り合うことが大切なんですよ。」と見解を述べる。しかしその一方で、F氏は「そのきっかけ作りが非常に難しいと思います。何か同じ目標っていうか、例えばフットサルやるとか、ブラジリアン柔術やるとかね。そういうところに行ったら、こう接触っていうのはもっと増えると思うけど。」と、日常生活レベルでの交流のきっかけ作りが困難であると指摘する。またG氏は「機会があまりないですし、正直、たぶん互いに互いが話しかけていいのか、友達になれるのかどうなのかっていうのが、手探りなんですよ。分からないんですよ。言語がまず話せるか分からないので、近づいて行って、まず話せるかどうかを探って、で、話せる、よし通じると思ってそこからの、ねっ、あれなので。結構難しいんですよ。」と両者が対面した際の様子を具体的に説明する。

以上のことを踏まえると、先行研究やF氏とG氏のインタビューから、大泉町のブラジル人と日本人は互いに、普段の生活において、交流が生まれる機会や交流を促す機会をあまり持っていないことが伺える。つまりフットサルクラブで見られた④「交流の土壌」の醸成によって、フットサル以外やフットサルクラブの外で生まれる⑤「日常生活レベルの交流」(図③の矢印参照)は、大泉町のブラジル人と日本人の交流の発展に寄与できる可能性があると考えることができる。

第2節 考察

ここまでの結果と分析を基に考察する。まず、日本人がブラジル人を包摂する「従来の流れ」の交流ではなく、ブラジル人が日本人を包摂する①「逆流」の交流の存在が、大泉町の本フットサルクラブで確認された。また、この「逆流」の交流は3つの要素を含み、日本人をブラジルの世界へと包摂する(②「包摂される日本人」)。そして包摂された日本人は、ブラジル人やブラジル文化・習慣を徐々に特異な存在から自然な存在として受け入れ始め、ブラジル人と交流を持つようになる(③「交流」)。さらに両者は交流を通して、様々な局面や場所でのより良い関係を築く土壌を獲得する(④「交流の土壌」)。この交流の土壌は、大泉町におけるブラジル人と日本人の日常生活レベルでの交流を育み、様々な場面で、

両者の様々な人々と交流する機会が得られる可能性を示唆することができた(⑤「日常生活レベルの交流」)。

つまり本研究では、フットサルクラブのブラジル人と日本人の間に、「逆流」の交流が起点となり、それまであまり活発でなかった両者の交流が生まれ、「日常生活レベルの交流」に繋がる可能性を持つ交流の現象が観察できたと言える。

そして本フットサルクラブが生み出すブラジル人と日本人の「日常生活レベルの交流」がもたらす影響について、石黒・後藤(2011)の研究が興味深い示唆を提供してくれる。石黒・後藤は、東京新宿区で外国人居住者が最多の大久保2丁目を研究対象地とし、アパートの外国人居住者に対して、そのアパートの大家が行う管理業務外の支援活動に注目し、その支援活動が地域に対して持つ役割を明らかにした。その中で大家が外国人居住者とコミュニケーションを取ったり、外国人居住者が必要とする情報を提供したりすることで、外国人居住者がその地域に長く住むようになり、町会への参加を促し、地域の発展に共に貢献するという動きがあることについて言及した。このような動きは、本フットサルクラブが生み出す「日常生活レベルの交流」からも、大泉町においてブラジル人と日本人が、共に協力し合いながら町の発展に寄与する可能性を示唆していると私は考える。

また、外国人との交流における町内会の役割について小林(2012)は、外国人が混在する北海道稚内市と富山県旧新湊市を事例に、外国人との交流が活発ではないことなどから生まれる、外国人全般に対して偏見を持つ問題の改善策として、町内会の活用を提起している。現在、町内会はかつてのような組織力はなく、参加者数も減少しているが、それでも過半数以上の住民が参加し、催事等では中心的な役割を担い、広く地域住民に接点を提供している役割の大きさを述べている。

しかしその一方で、小林は「旧来住民が主導する傾向にあり、接点形成の契機あるいは啓発を含めた情報周知期間としては有効ながら、日本人と外国人が対等な立場となりえないという問題もある。」と町内会の欠点にも言及している。このことを本フットサルクラブに当てはめて考えると、町内会ほど地域全域に影響を及ぼす力はないと考えられるが、ここではブラジル人と日本人が対等な立場で、さらに楽しみながら交流を育む力はあると考えられる。

また本間(2012)は、外国人母親の料理教室の中で生まれる学びのネットワーク形成の過程で『料理』『人に会う』『つながりを維持・再生する』『一人ではできない課題を協同で実現する』という新たな目的が次々に生成され、つながりは質的に転換されていった」と言

及している。本フットサルクラブでも同じように「フットサル」「人(ブラジル人または日本人)に会う」「つながりを維持・再生する」「一人ではできない課題を協同で実現する」と、つながりが転換していると考えられる。

これらの先行研究以外にも、筆者である私自身が大泉町を訪れ、様々な人々の話を聞く中で、本フットサルクラブが生み出すブラジル人と日本人の「日常生活レベルの交流」がもたらす影響について、重要な示唆を得ることができた。

12月に私は、大泉町役場で開かれた大泉町の歴史や多文化共生施策に関する説明会に出席した。この説明会は、大泉町を研究対象にする研究者や学生向けのもので、参加希望者が一定人数集まった際に、不定期で行われるものである。この説明会の中で役場の担当者が「行政として、大泉町の多文化共生社会の実現に向けて様々な施策を施す努力は今後も行うが、最も良いことは役場が関与せず、『ハレの日(非日常)ではなく、ケの日(日常)』において、ブラジル人と日本人の交流が豊かになることが望ましい形である。」と見解を述べた。この見解を聞いた時、私は、「確かにお祭りのような非日常での交流も良いが、ごく普通の普段の生活の中でブラジル人と日本人の交流が豊かである方が、両者の関係に良い形をもたらすのではないか。」と考えるようになった。そしてこの疑問を大泉町観光協会で尋ねると、G氏が「行政に『仲良くやってくれ』と言われたところで、仲良くなる問題じゃないですか。きっと長い年月をかけて少しずつ仲良くなって行くものだとは私は思います。今までの上の世代って、結構ブラジル人が突然入って来て、大量に住みだして、色々騒いだりとかっていうことがあって、まだちょっと厄介者、トラブルメーカーっていうイメージがあるんですよね。だけど若い世代になってくると、一緒に学校で勉強をして、一緒に成長して、一緒に働きだしてっていう世代に関しては、たぶんそこまで抵抗はないと思うんですよ。そういった世代の子どもたちが、もうちょっとね、あの一増えてくればその部分に関してはいいのかなとおもうんですけど。」と見解を述べた。確かに本フットサルクラブでブラジル人と日本人の子どもたちが、一緒にフットサルをしている姿を眺めていると、日本人と日本人、ブラジル人とブラジル人、ブラジル人と日本人という組み合わせで、それぞれの交流に関して研究する意味はないようにさえ感じられた。こういった世代だけの時代を待つのも1つの方法かもしれない。しかしながらやはり、今現在のブラジル人と日本人の「日常生活レベルの交流」を促進させ、両者の交流が豊かな地域社会の形成に結びつくように、真剣に考える意義はあると考える。

そしてその際、従来のように日本人がブラジル人を包摂する「従来の流れ」の交流から

考えるだけではなく、ブラジル人が日本人を包摂するという「逆流」の交流を始点として考えることを1つの提案とする。

本研究では、日本人がブラジル人の間で活発な交流が見られるフットサルクラブを事例に取り上げ、研究を進めた。本フットサルクラブのスクールで、毎週1回や2回訪れる人々であるならば、彼らの日常生活の一部に、自然な形で、かつ両者がお互いに楽しめることで交流を持てるために、より良い関係が築ける可能性が高い。しかし、例えば年に1回のカルナバルであっても、G氏が指摘する「あまりブラジル人目線に立っていないイベントだったりする部分ってあるんですよ。ブラジル人ってそんなにサンバ好きじゃないですし。」というブラジル人側からの視点で捉えて、「ほんとはもっと気軽に、例えば、ブラジルのそういうサンバ系の音楽が流れてるところでみんなで一緒に踊ったりとか、ご飯を食べたりとか、お話をしたり、お酒をしたり、そういうことが好きなので、そういった部分でブラジル人の意見を入れて、一緒に主催でやって行きたいっていうのが良いんですよね。そうやって踊ること、食べること、お酒を飲むことも、お祭りも日本人って好きじゃないですか。そういった部分で文化交流もできればってことですよね。」といったような形が実現できれば、今よりもブラジル人の参加者が増え、日本人との交流のきっかけができることが期待できる。

以上の考察から本研究の目的である、群馬県大泉町のフットサルクラブにおいて、ブラジル人と日本人の間に、どのような交流がなされているのかを考えると、普段の生活では活発な交流があまり見られない両者であるが、ブラジル人移民が設立した本フットサルクラブでは、移民受け入れ国・地域の日本人を「逆流」の交流という形で包摂した結果、両者の間で交流が生まれ、そしてその交流が「日常生活レベルの交流」にまで転換される可能性が観察できたと結論付けられる。

第3節 研究の限界と今後の課題

本研究はインタビュー調査が研究方法の軸となっている。しかしそのインタビュー調査において、筆者がポルトガル語を全く話せないために、日本人と日本語が堪能なブラジル人にしかインタビューを行えないという制約があった。そのため、ブラジル人と日本人の交流についてより深い研究を行うためには、ポルトガル語によってインタビュー対象者の幅を広げる必要がある。

また、本研究は質的研究の見地から行った研究であり、量的研究は行っていない。質問紙調査などを同時に行えば、ブラジル人と日本人の交流の実態を明らかにできると考える。

さらに、大泉町に本フットサルクラブが存在することで、それまで交流を持たなかったブラジル人と日本人が、ここでの交流を1つのきっかけに、共に地域社会の形成に寄与する活動を行うような現象を観察することができれば、スポーツクラブがより社会的に価値のある存在になる。このような現象の追求が今後望まれない。

参考文献

・法務省 登録外国人統計統計表

①国籍（出身地）別在留資格（在留目的）別外国人登録者

②都道府県別在留資格（在留目的）別外国人登録者（その3 ブラジル）

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001089591>

・「大泉町外国人の人口及び比率の資料(2012年10月31日)」

大泉町役場 配布資料

・小内透(2009)『講座 トランスナショナルな移動と定住 第1巻 在日ブラジル人の労働と生活』御茶ノ水書房

・渡辺雅子編著(1995)『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 (上)論文篇・就労と生活』明石書店

・渡辺雅子(1995)「日系ブラジル人出稼ぎ者の生活世界—ライフスタイルの変化と地域生活—」都市問題 第86巻 第3号 1995年3月号、東京市政調査会

・移民研究会編(深見麻)(2008年)『日本の移民研究 動向と文献目録Ⅱ 1992年10月—2005年9月』明石書店

・水谷豊(2000)「日系アメリカ人のスポーツ史についての一考察 ダン・フクシマとバスケットボール」桐朋学園大学短期大学部紀要 第18号、桐朋学園大学短期大学部

・永田陽一(1994)『ベースボールの社会史 ジミー堀尾と日米野球』東方出版

・足立聿宏(2012)「ハワイ AJA 野球リーグの現状と将来の展望—ハワイ最後の民族野球リーグと日系コミュニティー」移民研究年報 第18号(2012.3)、日本移民学会

・窪田暁(2012)「移民と故郷をつなぐペロータ(野球)—アメリカのドミニカ移民コミュニティにおけるスポーツ実践—」移民研究年報 第18号(2012.3)、日本移民学会

都築くるみ(2002)書評論文「小内透、酒井恵真編著『日系ブラジル人の定住化と地域社会—群馬県太田・大泉地区を事例として』御茶の水書房(2001)」大原社会問題研究所雑誌 529号 2002年12月号、法政大学大原社会問題研究所

・「大泉町資料—大泉町の外国人急増の背景—」

大泉町役場 配布資料

・「大泉町資料—大泉町の主な多文化共生施策—」

大泉町役場 配布資料

・ウヴェ・フリック著、小田博志監訳(2011)『新版 質的研究入門<人間の科学>のための方法論』春秋社

・Kohli,M(1978) “‘Offence’ und ‘geschlossenes’ Interview: Neue Argumente zu einer alten Kontroverse,’ Soziale Welt, 9:1-15.

・西條剛央(2007)『ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編 研究の着想からデータ収集、分析、モデル構築まで』新曜社

・石黒雅之、後藤春彦(2011)「外国人居住地域における木造賃貸アパート大家の役割—大家の外国人居住者への支援活動に着目して—」日本建築学会学術講演梗概集 F-1 都市計画 建築社会システム、社団法人日本建築学会

・小林真生(2012)『日本の地域社会における対外国人意識 北海道稚内市と富山県旧新湊市を事例として』福村出版株式会社

- ・本間淳子(2012)「外国人母親によるネットワーク形成の可能性―協同的な活動『料理教室』を事例として―」 異文化間教育 35 号、異文化間教育学会

巻末資料

《インタビュー①》

調査対象者：A 氏

国籍：日系ブラジル人

現職：研究対象フットサルクラブの経営者兼コーチ

前職：元プロフットサル選手(ブラジル)

居住地域：大泉町内

インタビュー日：2012 年 12 月 14 日

I:調査者(筆者)

A：A 氏

(以下インタビュー記録)

I：日本にやって来る前、ブラジルで、どんなお仕事をされていましたか。

A：ブラジルの銀行で仕事をやって、銀行のフットサルのトップチームに入りプレーをした。

I：何歳の頃にプロになったのですか。

A：20 歳の頃にプロになり、27 歳ぐらいまでやっていた。

I：フットサルのプロをやっていて、なぜ日本にやって来ようと思ったのですか。

A：最初は仕事を茨城県の方でコンクリート関係の仕事をやっていた。それで、フットサルを始めようと思った時に、日本ではフットサルをやっている人が全然いなかった。でもブラジルではすごい人気があるので、僕と弟は考えて、日本人の身体はちょっと小さいのだ

けど、それがフットサルには一番いいと思う。身体が大きかったら、動いたり戻ったりすることがちょっと大変。その身体の特徴はブラジル人も一緒。凄い人気がある。

I：日本にやって来た理由は、お金を稼ぎに来たのですか。

A：そう。

I：その時にフットサルのことは考えてなかったのですか。

A：うん、考えていない。

I：でも茨木で仕事をしている時に、フットサルをやろうと思ったのですか。

A：そう、そうそうそうそう。色々考えた。

I：大泉町にやって来た理由は何ですか。

A：あの一、友達に呼ばれた。ブラジルでフットサルをやっていた仲間で、それで呼ばれました。

I：その友達もブラジルでプロだったんですか。

A：プロではない。

I：その友達に誘われて大泉町に来たのですか。

A：そうです。

I：大泉町に来てから、このフットサルクラブを作った理由は何ですか。

A：あの一、ほんとに、フットサルクラブはブラジルに行って、あっちでやりたかった。そ

れで、あっちは色々問題があって、泥棒多いし、ちょっと心配。それで日本に戻った。それでフットサルクラブを作った。

I：では、誰のために作ったのですか。

A：日系人と、弟、あとは友達 2 人、で自分で考えて作ったんです。

I：フットサルクラブができた最初の頃、日本人はいましたか。

A：いちばん最初は、あの一、いなかったです。3 か月ぐらいに 1 人 2 人来て、それで 2 人、また 4 人とか、4 人また 8 人とか、8 人また 16 人とか、それで少しずつ増えて行った。

I：最初に来ていた日本人の方は、スクールに来ていたのですか。

A：ううん、試合、試合。

I：日本人がフットサルクラブに集まって来るようになった理由は何だと思いませんか。

A：ここは、入って、たぶんブラジルみたいです。たぶん。あの一、食べものとか、あの一、色々教えてるとか、あとは、うーん、挨拶とか、ここ入ってすぐ、あの一分かる、たぶんあの一日本人じゃない、色々ブラジルとか旗とか、それたぶん。

I：ブラジルのものに、日本人が惹かれてやって来た。

A：そうです。

I：フットサルクラブで日本人と日系人のブラジル、ペルーの人たちは、どんな様子でフットサルを一緒にやっていますか。

A：前は前は、最初は日本人はすごいびっくりした。あの一、たまにできる人は、あの一

工芝、それでたぶんここは初めて、人工芝じゃないでしょ。あとは一、ブラジル人はドリブル、ドリブルとか、あの一ボールコントロールとかすごい上手い。それで、日本人見てすごいびっくりした。今は一、あまりびっくりしない。日本人は、その一ちっちゃい頃からサッカーやって、フットサルもやって。ずーっと前は野球だけ。今は一、ここも幼稚園、3歳日本人、4歳日本人もいるし。それで、ちっちゃいから日本人とブラジル人、ね、色々コンタクト取った挨拶とか、それであの、すごいいいと思う。この前に一、例えば初めてブラジル人見た、ちょっとびっくりとかあった。今は、ちっちゃいから、怖いとかない。ずっと前は、子どもから「外人怖い、怖い。」今は全然もうない。サッカー、すごい、あの一、何とかサッカーとかフットボールとか仲良し。

I：子どもたちは小さい頃から、そうやってお互い仲良くなったりしますが、大人たちはどうですか。

A：全然問題ない。全然問題ない。あの一サッカーの人、コーチとか、あの一お父さんの子どもと一緒にやっている人、頭違う。ちょっと違う。すごい嬉しいとか、すごい心も違う。すごい仲良し。一緒に試合したり全然問題ない。

I：先ほど、ここがブラジルのもの、ブラジルの雰囲気がたくさんあると言っていましたが、どんなことをしてきましたか。

A：色々あるね。例えば、挨拶とか。まあ一例えば、初めての人、あっちから入って来て顔分らない。すぐ行く。「あっ、どうぞ。入って下さい。」あとは一、あとは一、色々、「子ども元気？」とか、「あっ、どうぞ見て下さい。中は入って下さい。」色々、あの一気持ち、すぐ話す。それで、最初は、ちょっと恥ずかしいね。最初はね。あとは一、ちょっと話して、「あっ、いいよいいよ。」それで、座って、子供見て、それでちょっと気持ちは変わる。

I：ここに来ることによって、日本人とブラジル人が仲良くなる役割を、ここのフットサルクラブが果たしていると思いますか。

A：そうそう。それは、この人が、もう一人も友達と話をして、「あー向こうはあの一すごいところ。」、それでもう一回話をして、それで、だんだんだんだん、それで増えた。

(インタビュー終了)

《インタビュー②》

調査対象者：B氏

国籍：日本人

現職：子どもの保護者

居住地域：大泉町外・近郊

子ども：男の子、小学生

子どものスクール歴：約1年半、週1回

インタビュー日：2012年12月15日

I:調査者(筆者)

B：B氏

(以下インタビュー記録)

I：子どもをこのフットサルクラブに、なぜ通わせようと思ったのですか。

B：うーん。あえて、今いるクラブチーム(地元のサッカーチーム)は、もう出来上がっている仲良しの子たちでいるんで、あえて、知らない子の中で、1個のサッカーボールがあれば、「一緒に、何か色んな国の人たちと、ボールがあればすぐ仲良く友達になれるんだよ。」っていうのを、本人に分かって欲しい。いろんな国の子たちと、言葉も分からないし、そういう中でも、ポンっと入った時に誰とでも、こう交流できるようになって欲しいなっていうのと。やっぱりサッカーよりフットサルの方が、判断力が必要なんで、ちょっとそれを小さい時から身につけさせたいかなって思って。

I：このフットサルクラブを知ったきっかけって何ですか。

B：もともと地元で住んでいたの。あることは分かっていました。

I：このフットサルクラブの雰囲気について、どう思われますか。

B：自由ですね。その自由さは、やっぱりお国柄ですかね。やっぱり日本のチームとかだと、規律とか、挨拶とか、礼儀とか、そういうのがすごく、まあうちのチームはそんなにうるさくないんですけど、じゃなく、ここの方が自らみたい。

I：このフットサルクラブの魅力っていうのは、どんなところに感じられていますか。

B：魅力はやっぱり、最初に通わせる時と同じで、色んな人たちと交流できる。

I：スクールの内容について、外から見ていてどのように感じていますか。

B：よくを言えば、もう少しボールを触る時間を多くしてほしいとかは、ありますね。やっぱりサッカーチームの方は、常にボールを触るって感じなんですけど、やっぱりここだと待ち時間もあって、その間に、待っている時に遊んじゃったりもあるんで、ちょっとそこはもったいないなと。

I：子どもがこのフットサルクラブに通う、意味や良さはどんなところにあると思いますか。

B：サッカーの面においたら、やっぱりフットサルで、こう判断力が早くないと、サッカーだとちょっと判断遅いんで、そういうのと、周りを見るとき。

I：サッカーに生きるテクニックみたいなものを、フットサルから取り入れることですか。

B：そうですね。それもあるし、結構うちの子、自分から知らない子に話しかけるとか、あまりしない方なので、あえてこういう色んな人たちと交流できて、たぶん今日もやってい

る時に、知らないんですよみんな。なんで、そういう、こう、前、ちょっとしばらく怪我して来てなかったんで、その間に入れ替わりがあったりとかで。でも、それでも楽しく今もやってるんで、ただ、そういうサッカーだけじゃないところ。

I：日系人たちと普通にフットサルができる環境で、子どもにとってどんな影響があると思いますか。

B：いいと思います。何かこう、差別じゃないけど、やっぱりほら外人さんって目で見ないところとか、やっぱりそういう挨拶にしても、こっちの人はこう触れ合うことが普通だったりするんですけど、でも日本人同士だと、やっぱり何かそういうのって親しくなるまでできなかったり。ただやっぱり人との交流とかですかね。

I：普段、子どもはこのフットサルクラブ以外で、日系人たちと交流していますか。

B：(B氏の暮らす町)ではないですね。ないですね。

I：保護者にとって、子どもをこのフットサルクラブに通わせる良さってありますか。

B：みんな全部一緒ですよ。やっぱり色んな子どもたちと、色んな国の子たち、言葉が通じなくてもサッカーができる、ボールがあればできる。

I：このフットサルクラブで、保護者同士の交流は、こういったものがありますか。

B：私は、逆にここに来ると日本の方というよりは、こっちのブラジルの人たちやペルーの人たちと関わることの方が多い。私は結構言葉を教わっています。あとお料理のやり方とか、あと調味料の、やっぱ、スーパーがあるので行ったら時に、「あの調味料は何に使うの？」とか、あとこう「ご飯食べて美味しかった料理の作り方は？」とか、教えてもらったりします。

I：Bさんから見て、他の日本の方と、ブラジルの方同士の交流って見られますか。

B：どうなんでしょ。私あんまり、人のことを見てないんで。

I：Bさんの暮らす町と大泉町を比べて、外国人の方に接する仕方が、何か違ったりしますか。

B：私の親とか世代の人って、やっぱりちょっとまだそういうのがあったりとかもするんですよね。やっぱり「外人さんだから」みいな。「マナーが悪い、うるさい。」とか。でも私たちよりももっと下の方が多分、学校にもいっぱいいるようになったんで、そうだからそういう、みんながみんなないっていう訳じゃないだろうけど、私は、やっぱりそういう言い方をするのは好きではない。

I：Bさんから見て、日本の方が、このフットサルクラブに来る理由はどんなことだと思いますか。

B：やっぱりブラジルのコーチがいてっていうのが魅力なんじゃないですか。何か本場のフットサルをやりたいと思っています。

(インタビュー終了)

《インタビュー③》

調査対象者：C氏

学年：中学生

国籍：日系ブラジル人

現職：スクール生

居住地域：大泉町外・近郊

スクール歴：約3年、週2回

調査対象者：D氏

学年：中学生

国籍：日本人

現職：スクール生

居住地域：大泉町外・近郊

スクール歴：約 2 カ月、週 1 回

インタビュー日：2012 年 12 月 15 日

I:調査者(筆者)

C : C 氏

D : D 氏

(以下インタビュー記録)

I : このフットサルクラブにやって来る理由を教えてください。

C : もっとサッカーがしたかった。普段は部活とかでサッカーをやってたけど、辞めたから来るようになりました。

I : サッカーからフットサルになぜ変えたのですか。

C : フットサルも楽しい。サッカーと違うので、楽しいっす。サッカーとフットサルの両方が上手になりたい。

I : D さんはなぜこのフットサルクラブに来るようになりましたか。

D : ええーと、とりあえず C さんがここでやっていて、それで一緒に来て、楽しくて始めました。

I : このフットサルクラブの良いところは何ですか。

C：楽しいんですよ。教える時はちゃんと教えて、まあみんなとたのしくできているんですよ。

I：このフットサルクラブと部活との違いは、どんなところだと思いますか。

C：うーん、まあ、そんな変わらないと思うんですけど、あるんっす。雰囲気とか。

I：このフットサルクラブの良いところは、どこだと思いますか。

D：フレンドリーっていうか、そのみんなが仲良くて、その国籍とかあんまり関係ないところとかが、楽しい。

I：初めてこのフットサルクラブに足を踏み入れた時、どんな印象を持ちましたか。

D：最初、Cさんに「みんな上手いのかな？」ってちょっと不安だったけど、みんな仲良く話しかけて来てくれたり、それからもうすぐ打ち解けて、楽しくできたことです。

I：普段、このフットサルクラブ以外で、ブラジル人やペルー人たちと会う機会ってありますか。

D：ないです。

I：毎週、このフットサルクラブにやって来ることで、何か普段の生活に変化はありましたか。

C：うーん、別に変化とかはないっす。俺は。特にないです。

D：ええー、いやまあー、みんなが性格明るくて、仲が良い性格だから、自分も他の人に優しくそうしてあげられるかなって思うようになりました。

I : (D さんの住んでいる町)にいて、大泉町ってどんなイメージなんですか。

D : やっぱその、こうこのフットサルクラブがあったりするから、やっぱ外国人が多かったりするイメージです。

I : C さんは日本人と、D さんは日系人と、このフットサルクラブ以外で、普段どこで交流がありますか。

C : 学校とかで、他はそんないっす。

D : C さんの家に行った時、やっぱお母さんとかお父さんと話したりする時とかです。

I : 2 人の出会いはいつですか。

D : 小学校が同じなんですけど、小学校の頃はあまり話していなかった。で、サッカー部と一緒に始めたら、家が近いんで一緒に行くようになったりして、それで仲良くなりました。それで部活を引退して、このフットサルクラブと一緒に来るようになりました。

I : このフットサルクラブに日本人が集まって来る理由は、どんなことだと思いますか。

C : 楽しくサッカーできるからだと思います。

D : やっぱりみんな国籍が違ってもフレンドリーだから、話しやすかったり、あとはその何か新しい外国の文化を知ることができるからだと思います。

I : C さんは日本人と、D さんは日系人と一緒にフットサルをすることを、どう思いますか。

D : やっぱレベルアップになるのかな、他の国のサッカーのスタイルだったり、勉強になる。

C : ちょっと分からないです。

I：このフットサルクラブで日本人と、または日系人と一緒にプレーすることで、相手に対する考え方や思いは何か変わりましたか。

C：何ていうんだろ、そんな変わらないと思いますけど、気楽に付き合えていると思います。それはサッカーの話しとかできるんで。

D：言葉が違うから、一緒に会話できないのかなって思っていたんですけど、日本にいるから言葉も分かっていて、その何か、ちょっと怖いのかなってイメージがあったんだけど、全然仲良くできて、だから他の外国人も別に話しかけたら、ちゃんと答えられるかなって思いました。

(インタビュー終了)

《インタビュー④》

調査対象者：E氏

国籍：日本人

現職：研究対象フットサルクラブのトップチームで現在プレー、同県内・他フットサルクラブ経営者兼コーチ

前職：元プロフットサル選手(イタリア)

居住地域：同県他市

インタビュー日：2012年12月19日

I：調査者(筆者)

E：E氏

【インタビュー記録内・固有名詞の省略名一覧】

A氏：インタビュー①に登場する、研究対象フットサルクラブの経営者兼コーチ

クラブ：研究対象フットサルクラブ

(以下インタビュー記録)

I：まず、EさんがA氏と出会った経緯を教えてください。

E：そうですね、あの一、僕も都内でフットサルの活動をしていた頃に、群馬の大泉の(クラブ)に、ブラジル人が集まるフットサルコートがあると聞いて、で、チームのみんなと行ってみようかってことで、それで行って見たら、たまたまその(自分の)チームの1人がブラジルなんかに留学してた奴がいて、それでA氏とサッカーをやったことがあるって。A氏が(クラブ)にいることは知らなかったんだけど、行って見たら(A氏が)いてっていう、そこからですね。

I：その出会いは、いつ頃の話ですか。

E：それが、だから2000年、ほんとに99年の(クラブが)できた頃とか、そんなもんだったと思いますよ。あの頃はね、ほんとに強いフットサルの、僕らの間で強い上手いって言われていた奴らは、ほとんどここに行ってるんで。

I：A氏のチームとの対戦では、どんな印象を受けましたか？

E：まあーもおー、やってることが違うなっていう。でも何だろう、それと同時に、これがフットサルなんだなっていうのを思って。まあーほんとにそこから通い出して、まあーちょっとなんか身につけてったのかなと思うんですけど。ほんとに競技性の違いを知ったって感じかな。

I：それはサッカーとフットサルの違いですか？

E：そうそう。サッカーのトレーニングにあるミニゲームとはやっぱり全然違って、やっぱりもう確立された別のものだってことが、もうすぐに分かりましたね。

I：初めてクラブに行かれた時、クラブの雰囲気になんか感想を持たれましたか？

E:びっくりしましたね。やっぱりブラジルとか外国にそれまで行ったことが無かったんで、あの一、ほんとに日本じゃねえなっていう、もう誰もがそういう風に思ったと思うんですけど、僕もそう感じました。もう売店に売っているものも違うし、そこにいる人も違うし、ゲームが始まって周りの声援っていうのも違ってたし、面白かったですね。

I: 当時クラブに集まっていた日系ブラジル人たちとは、日本語でのコミュニケーションは取れたのですか？

E: まあーそうですね、みんな片言だったですけど、何となくは通じていたのかなって思います。

I: プレー後に、何かお話はされていましたか？

E: そうですね、あまりそこまではなかったですけど、やっぱりその A 氏や A 氏の弟っていうところは、日本人に(フットサルを)広めて行こうっていう意識がその時からあったでしょうから、だから例えば日系人の大会に僕たちなんかが参加したら、積極的に話しかけてくれたりはありましたね。

I: その日系人の大会は、フットサルをしている日本人であれば、認知していましたか？

E: もうそれはみんな知っていたと思います。

I: 当時、その大会は日本において最高峰の大会だったのですか？

E: そうですね、そこに出ていた全てとは言わないですけども、何チームかはやっぱりトップレベルにありましたね。今の日本代表の選手の中にも、通った選手はいますね。

I: 次の質問ですけど、クラブに行かれて A 氏や A 氏の弟さん以外に、どんな出会いがありましたか？

E：そうですね、クラブのチームで活躍していた選手とはそこで出会ったんですけど。今、ほとんどの選手は日本にいないかな。ブラジルに帰っちゃってるんで。

I：今は彼らとの交流はないですか？

E：ないですね。はい。

I：A氏とは、今はどんな関係を持っていますか？

E：今は、このクラブのトップチームで群馬県リーグに出ているので、それを介しての関係ですね。A氏がこのクラブの経営者で、そのチームで僕たちはプレーしているので、そういう関係ですね。このクラブのピラミッドのトップで、僕たちがチームとしてやっているのがあって、その下に、高校生、中学生、小学生がいるっていう形なんですよ。

I：このクラブに来て、どんなことが得られましたか？何のことでもいいのでお話し下さい。

A：あそこに行ったことによって、僕個人的なものであるとすれば、本物が本当に観たくなかったっていう。そこで出会ったおっさんたちは、プロでも何でも無いけど、こんなに上手だし、じゃあプロの選手たちってどんななんだろうっていうのをやっぱり観たくなって、それで自分がフットサルにのめり込むきっかけになったのかなっていうのはありますね。

I：ブラジル人のテクニックの上手さ以外には、どんなところに惹かれましたか？

E：何でも勝負事に対する想い、やっぱりそういう強さ、そこがやっぱり日本人とは全然違って。勝ちか負けかってのがあるとすれば、やっぱりどうやっても勝ちたいっていうところの駆け引きっていうのかな。上手い下手じゃないところでの勝負事っていうのが、強さを感じましたね。

I：EさんやEさんの仲間が、このクラブの人たちに提供できたものは何かありますか？

E：僕たちが行くことによって、何だろう、コマーシャルってい言ったら大げさだけど、やっぱり自分たちが感じたことだったり驚きってのを、僕たちの周りの人間に伝える訳ですよ。それによって、このクラブに行った人間もいただろうし、そういう意味での交流のきっかけを作ったっていうのはあると思います。あそこに日本人が多く行くっていう。もちろん僕たちが行く前から、もう行ってた日本人もいたし。でも僕たちが行ったことで知った日本人もいたし。

I：Eさんにとって、このクラブはどんな存在になっていますか？

E：そうですね、これからの自分のサッカーとかフットサル人生の中の道具、道具って言ったらあれですけど、材料というか。彼らと協力することと、今プレーしているチームを使って、どんな良いものが人生を賭けて、人生を通じて作れるか。また次の世代の子どもたちがそこを目指してやってくれるような場所にもなれば良いと思うし。はい。

I：このクラブや大泉町以外で、Eさんは普段ブラジル人たちとの交流はありますか？

E：そうですね。どうだろう、ブラジル料理のレストランに行くとか、大泉町以外でも、高崎でもそうですし、あとは埼玉県の本庄市っていう所でも、選手が輸入雑貨のお店をやっているんで、そこ行ったりもするかな。あと、結局ボールを蹴る繋がりになっちゃうんだけど、近くで言えば、彼らのクリスマスパーティーに呼んでもらったりとかもしてますし。まあ、もとを辿れば結局ボールを蹴る仲間なんですけど。

I：フットサルを通してブラジル人と交流ができる前と、出会った後で、何かブラジル人とかブラジル文化、国に対するイメージに変化はありましたか？

E：そうですね、何だろうな。僕が半年間、あのイタリアの後にブラジルに行ってるんですよ。で、そこで知ったことも多いんだけど、まあ、サッカー以外の面、やっぱ暮らしの面であったり、文化っていうところでは、もう、もちろんこのクラブでの経験や、実際にブラジルに行った経験ってのがありますね。やっぱり文化のところが大きいかな。

I：このクラブの雰囲気は、ブラジル本国に行かれた経験から見ると、同じというか、かな

り似ているのですか？

E：そうですね、はい、似ていると思います。あのクラブの空間はもうブラジルでしょ。それが大きいか小さいかだけの違いで。

I：このクラブやA氏が、群馬県や日本のフットサル界にどんな影響を与えていると思いますか？

E：今、実際にはどうなのか分かりませんが、遡って言えば、やっぱり本物を紹介したって言うか、フットサル、多分僕が感じたことと一緒に思うんですけど、サッカーのミニゲームとフットサルの違い、競技性の違い、それを明確に、彼らが日本人にプレゼンしたんじゃないかなって思いますね。

I：今のフットサル日本代表の中にも、このクラブでプレーした経験がある選手がいるとのことでしたが、フットサル界のトップでプレーしている選手の中には、ここ大泉町がフットサルの聖地のようなイメージがあるのでしょうか？

E：まあ、多かれ少なかれあると思います。このクラブの名前を聞けば「はいはい、どのチームだね」って分かるしね。

I：Eさんがこのクラブに来て、ここの人たちと繋がりが持てたと実感できたのは、どんなことからでしたか？

E：そうですね、繋がりを持てたのは、まっ、飯食った時かな。始めは試合して対戦して、さよならっていうところから、「飯行こうよ」っていう風になったぐらいから、まあーね。たぶんどうでもいい奴だったら飯には誘わないだろうし、うん、はい。

(インタビュー終了)

《インタビュー⑤》

調査対象者：F 氏

国籍：日本人

現職：大泉町観光協会・職員

居住地域：大泉町近郊

調査対象者：G 氏

国籍：日系ブラジル人

現職：大泉町観光協会・職員

居住地域：大泉町近郊

インタビュー日：2012 年 12 月 20 日

I:調査者(筆者)

F : F 氏

G : G 氏

【インタビュー記録内・固有名詞の省略名一覧】

クラブ：研究対象フットサルクラブ

(以下インタビュー記録)

I : F さんと G さんの目から見て、普段の日常生活で、ブラジル人の方々と日本人の方々はどんな場面でどんな交流があるか教えてくださいませんか？

F : 私がここ(商工会・大泉町観光協会)に入ったのがちょうど 4 年前なんですよ。それでやはり、そんなにはないんですよ。一緒に何かやるとかはね。で、例えば、日本人がレストランに行ったり、何か行ってやると、向こう(ブラジル人)は非常にフレンドリーに仲良くなって、もう 2 回目から握手したりそういう風になるけど、まだまだ大泉に住んでる方、日本人は、そこまでは行ってないですよ。ただ、ブラジルのレストラン何かは、日本人をウェルカムしたいので、色々味付けを変えたり、そういう努力はしていますね。

G：普段の生活だと、多分普通に生活して行く中で、職場にいたりするので関係はあるんだけれども、言語が通じないから、あんまり、こう関わりを持ち切れないっていう部分と、あとはほんとに生活の、買い物をする所でも、日本のスーパーに通うわけですから、日本のスーパーで人に会ったりとか、日本の人に対応してもらったりとか、たぶんそれぐらい。あとはほんとに、子どもとかがいれば、子どもの父兄なので、やっぱり学校に行って、お母様友達を作ったりとか、そういうのがないと、なかなかやってけなかったりする場合もあるので。それぐらいかなと思います。

I：カルナバル(大泉町のサンバ祭り)という一大イベントの中で、日本人とブラジル人は、どんな形で交流されていますか？

F：そうですね、主催者側には一切ブラジルの方は入ってなくて、あっ、一部、観光協会の理事さんになっているので、あの一、雑誌を作るとこの人間と、日伯センターっていう日本語学校の経営者ですね、そのお2人はイベントの主催者側に入っています。で、一緒にお手伝いしてもらって、それであとは、ブラジルだけじゃなくて色んな国の人は、出店者としてカルナバルに参加ということですね。

I：出店者の方のことですが、日本人の日本料理とかの出店もありますか？

F：ありますね。他にはブラジルだ、やれ韓国だわ、ペルーなど10カ国ぐらい出ますから。なるべく来年からはもっとブラジル色を強めたいと、なるべく日本食は入れないでっちゅう考えが副会長の考えですね。

I：カルナバル当日の賑わいについてですが、当日はどれぐらいの方が来られますか？

F：昨年は3万5千人っていう公表ですけどね。これは主催者側の公表で、話半分ぐらいでいいと思いますけどね。まっでも6回目で、だんだんこう人は増えていますね。マスコミで紹介されましたし、遠くは九州の方からわざわざ観に来るとか、もうだから県外の人の方が多いんですよ。

I：大泉の人たちにとっても、年に1度の大きなお祭りって形で受け入れられていますか？

G：うーん、逆に町内の人間の方があまり興味を持っていないし、知らないっていうパターンがありますね。

I：それは意外な返答なんですけど、それはどういう理由が考えられますか？

F：その理由はやっぱりその昔のお祭りで、ブラジル人が大騒ぎしたこと。それでこのカルナバルになって、その後に2002年のワールドカップでブラジルが優勝した、あの時がもの凄かった。やっぱり朝までドンチャン騒ぎして、これも警察でペケもらって、で結構、大泉の人たちは反ブラジルっていう方も多いんですよね。

I：でもそういう特別な時がない限り、夜通しバンバン騒ぐってことはあるんですか？

F：ないですね。今はあんまりないんじゃないの？

G：そうですね。比較的落ち着いてはいますね。でももともとお国柄夜遅くに出るってことも普通ですし、音楽とかも結構音量が大きいってのも、お国柄人柄なので、未だにちょっとはありますけど、まあイベントでもない限りはダァーってことはないの。

I：それではもうひとつのイベント「活きな世界のグルメ横町」はいつ頃から始まったイベントですか？

F：これはね3年前の4月から、いずみ緑道のあそこを何もやらないのはもったいないってことで、町長の方から何かやってくれないかと、要するに町の活性化に絡めて。それで観光協会が「じゃああそこで屋台、店を出して、でステージでイベントをやるってことで3年前の4月4日が最初で、それ以降、毎月第4日曜日にやろうってことで。最初は本当に、テントのお店も10いくつぐらいの寂しい、まだGさんも入ってなかった頃で、で、段々こう回数を重ねるごとに、店も増えるし、もう断るぐらいの状況になりましたしね。ステージもうちの方でちゃんと特設ステージを作ってもらって。今まではタイルの上でた

だやっていたのを、ちゃんとステージ1段高いところへ作ってくれて、ダンスだ歌だ踊りだという風に、ありとあらゆるパフォーマンスをやってもらっているんですよ。で、出演者もかなり増えてきています。

I：カルナバルと横町の1年に1回と毎月1回の違いは、なぜできたのですか？

F：横町は、大泉でお店をやっていて、月に1度そういうイベントがあれば、人が集まるモノが売れるっていうことで、町の商店飲食店の活性化に繋がるということですね。で、人が来ればまたその帰りに何か買い物したりとか、そういう波及効果もあるだろうと。

I：横町のイベント自体は、大泉の町内に暮らしている人たちには広く知られていますか？

G：そうですね。結構比較的あそこを通るとやっているの、寄ってみようかなって人は多いみたいで。

F：垂れ幕もありますし、垂れ幕の側もイルミネーションで飾ってありますから。

I：少し話が戻りますが、日常生活の場で、日本人とブラジル人の交流はあまりないとのことでしたが、こういうイベントならば、顔を合わせる機会ができていると私は考えています。そこで、日常レベルでの交流をもっと盛んにしようとすれば、どんなことがあればいいと思いますか？

F：だからやっぱり共同作業にしないと、共同主催っていうかね。そうして行けば、段々こういうように接触してければ、色々。私も最初は全然知らない人ばかりでしたから、こうただ会えば「こんにちは」ぐらいでね。でも段々こう会って話して握手したりね、あの色々話すようになりますから、まずは知り合うことが大切なんですよ。そのきっかけ作りが非常に難しいと思います。何か同じ目標っていうか、例えばフットサルやるとか、ブラジリアン柔術やるとかね。そういうところに行ったら、こう接触ってうのはもっと増えると思うけど。

G：機会があまりないですし、正直、たぶん互いに互いが話しかけていいのか、友達になれ

るのかどうなのかっていうのが、手探りなんです。分かんないんですよね。言語がまず話せるのか分からないので、近づいて行って、まず話せるかどうかを探して。で、話せる、よし通じると思ってそこからの、ねっ、あれなので。結構難しいんですよね。

F：大泉に住んでいる人は、やっぱりブラジルのスーパーに行ったり、ブラジルのレストラン行ったり、たぶんあんまりしてないよね？

G：してないですね。比較的、うーん、あんまりしてないと思います。外からの人の方が。

F：うん。だから逆に、外からの人が色々ホームページ見たりね。あとはバスで来たり。それで行って見たら向こうの店員さんが日本語話せますから。それでブラジル語講座なんと言うのを、はとバスのツアーでは軽くやるんですよ。挨拶とかね。そういうのでほら、話しかければ。

I：大泉町の役場の方が「役場として多文化共生の施策は様々にやっているが、一番良いのは、役場は関与せず、自然に日常生活の中で、日本人とブラジル人が交流できることです。」と話されていたのですが、この考えについてお2人はどのように思われますか？

F：難しいね。うーん。

G：行政に「仲良くやってくれ」と言われたところで、仲良くなる問題じゃないじゃないですか。きっと長い年月をかけて少しずつ仲良くなって行くものだと思います。今までの上の世代って、結構ブラジル人が突然入って来て、大量に住みだして、色々騒いだりとかっていうことがあって、まだちょっと厄介者、トラブルメーカーっていうイメージがあるんですよね。だけど若い世代になってくると、一緒に学校で勉強して、一緒に成長して、一緒に働きだしてっていう世代に関しては、たぶんそこまで抵抗はないと思うんですよ。そういった世代の子たちが、もうちょっとね、あの一増えてくればその部分に関してはいいのかなと思うんですけど。日本語話せて、ブラジル人が。

F：あとだからこちらに、日系の人なんか来て、ずっともうこちらに骨をうずめるよとい

う人もいれば、何年かすれば帰りたいと思う人もいるから。

G：そういう人が一番難しいです。

F：そういう人は溶け込もうとはしませんのでね。

G：溶け込む気がもともとないんですよ。

F：うん。そういう問題があるから、だから子どもたちも日本人の、要するに日本の公立の学校へ、小学校中学校へ入る人もいれば。さっき言ったブラジルの学校へ行く人、こういう人はもうだいたい帰ることを前提だよな？

G：そうです。そういった違いがありますね。

I：(研究対象フットサル)例えばあのクラブでは、ブラジルのフットサルだけでなく、ブラジルの言葉や文化を体験させ自然に伝えてると、私はあのクラブに足を運んで感じました。あのクラブが単にフットサルを教えているだけじゃない、他の部分について、お2人はどう思われますか？

F：私はあのクラブでそういうのをやっているのを知らなかったしね。

G：あのクラブは比較的日本の通っている子が多いんですよ。小さい世代から。

F：フットサルもね、数がああいう形になれば、もっともっと今後人気が出て、大泉のチームは強いって評判もあるしね。そういうんで、フットサルをきっかけとして、それだけでなく、ブラジルと日本人の交流がどんどん深まってくというのが、できると思いますよね。

I：あのクラブ以外に、日常生活のレベルでできる、例えばブラジリアン柔術やサンバのダンス教室のようなものは、大泉町にはたくさんあるんですか？

F：たくさんはないですね。ブラジリアン柔術とカポエラとフットサル。

G：たぶんこの3つだけですね。スポーツ系だと。

I：スポーツ以外に何かありますか？

F：でもないか。でもないですよ。あとは、生活レベルだとならないですね。

I：例えば料理とかは？

G：あー、やってないんですよ。何か昔は町とかがやっていたみたいなんですけど。

F：町主催で、外国人のパーティーがあったり、外国の料理の講習会みたいなものがあったり、そういうのはありますけどね。

I：今後、大泉町の日本人やブラジル人、他の外国人を全員巻き込んで、町の発展に取り組む観光協会のアイディアがあれば教えていただけますか？

F：まず考えているのは、今、日本人が主体でやっているカルナバルにブラジル商店協会を入れたり、あとは観光協会の理事にそういうブラジル人も入れて、そういうのでカルナバルやグルメ横町を一緒にね、共同主催でね、一緒に企画も立ててっていうのが来年はやって行きたいってのが、副会長の考えですね。もうカルナバルの会場に来たら「ここはブラジルじゃないか、日本じゃない、異国に来た」っていう、そういうような会場にしたいっていう夢がありますね。

G：今、現在うちがやっているイベントって、例えばカルナバルなりそういうのって、あんまりブラジル人目線に立っていないイベントだったりする部分ってあるんですよ。ブラジル人ってそんなにサンバ好きじゃないですし。

I：そうなんですか？

G: そんなにサンバって好きじゃないんですよ。サンバの音楽とか流れてればリズムに乗るし、とかですけど、別にそんなにサンバ、ずーと一日、日本の方みたいにカメラ抱えて一日中観ているとか、そういうところとかってあんまりなくて、ほんとにもっと気軽に、例えば、ブラジルのそういうサンバ系の音楽が流れているところでみんなと一緒に踊ったりとか、ご飯を食べたりとか、お話をしたり、お酒をしたり、そういうところが好きなんですよね。別にサンバがそんなに好きとかではなくて、盛り上がるのが好きなので、そういった部分でブラジル人の意見を入れて、一緒に主催でやって行きたいっていうのが良いんですよね。そうやって踊ること、食べること、お酒を飲むことも、お祭りも日本人って大好きじゃないですか。そういった部分で文化交流もできればっていいことですよね。

I: 先ほどのお話の中で出た内容に戻りますが、大泉町のブラジル人の中でも、何年後かにブラジルに帰るつもりの人たちと、ずっと日本で暮らしていこうと考えている人たちがいて、両者は違うとおっしゃっていましたが、この両者の間で分断は生まれているのですか？

G: 正直、生まれていると思います。日本の学校の教育課程を受けて行く段階で、行動とか考え方とかが結構、まあ人にもよりますが、日本人化して行く人、ブラジル人のまんま「俺はブラジル人」っていう凄いアイデンティティを持ち続ける中で、結構反発し合っていくんですよ。たぶんお国柄のアイデンティティのかみ合わないところってあるんですよ。なんでブラジル人同士の中でもあって。私も凄く日本人寄りの人間なので、中には、ブラジル人のやっていることを見てて、合わなくなっている部分って凄くあるんですよ。時間にルーズだったりとか、そういうところで凄く合わなくなってくる部分もあるので、言葉の壁も出てきますし、文化の壁も出てきますし、そういうことでの分断、差別化っていうのは出てくると思います。うーんそうですね、たぶん就職とかしても別になっちゃうんですよ。私みたいに日本語が話せる人間と、話せないブラジル人っていうと、もうそこで別れちゃうんで、そこがたぶん一番大きいところかなって思いますね。

F: 例えば日系ブラジル人の〇〇さんは、ブラジルの時は日本人に見られたと。

G: 日本人なんです、向こうでは。

F：そう、向こうでは。それで日本に来て 30 数年経っているけど、日本ではやっぱりブラジル人だと。そういうこともあるんですよね。

(インタビュー終了)